

〔青森中央学院大学開学20周年記念〕

# 青森中央学院大学開学20周年記念 国際歴史シンポジウム グローバル化の中の東北と近代移行期の「音」文化

北原 かな子

〈趣旨文〉

## 移行期のグローバル化

本シンポジウムは、東北を対象として、近世という時間の枠組みから近代とされる明治期までの社会や文化をグローバル化の視点から論じるものである。この時期は開国を機として人やものの動きが大きく変わった。国が近代国家建設に向けて動く中、使節団の渡航や御雇外国人の招聘、さらに留学や移住など国境を超えた人と人の繋がりが開始されるようになった。これはいわゆる「グローバル化」(Globalization)の一環であり、国家を媒介した対外派遣使節団や御雇外国人の功績など、これまでもさまざまな研究が豊富に蓄積されている。

「グローバル化」は、複数の国家が相互に結びつきを強め、相互に共同して行動し、互いに経済的、文化的に影響をあたえあう事象全般をさす「国際化」(Internationalization)とは必ずしも同義ではない。18世紀前半には、対外的には東アジアを媒介とした関係だけでなく、新たな欧米との文化接触がはじまり、国内的には藩といった封建的な枠組みを乗り越える労働力の移動や文化のひろがりなどが19世紀を通じて加速されていく。このような、国家を媒介としない、あるいは国家の意図を越えた人や文化の移動は、新しい生産や生活の形、そして意識をもたらすこととなる。しかし、その変化は明治維新というとらえ方がもつ、江戸と明治の断絶、急速な近代化、非文明から文明開化へとといった変化ではない。それは、きわめて緩やかに日常のなかにあらわれる。

そうした歴史・文化はどのように、描きだすことができるだろうか。18世紀前半にはじまるプレ・グローバル化は、近代における国際化をへて、旧来の国家や地域などの境界を越え、地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現代のグローバル化に至っている。だとすると、なによりも、それは断続することのない一貫した時間の流れとして捉えることが必要となり、さらにそうした時間の流れのなかで、どのように人間が生活し、生産し、意識したのかを探ることが必要となる。

## 「東北」という地へのまなざしと音楽という視点

このシンポジウムでは、この問題を「東北」という地に視点を据えて考察する。周知のように近代への移行期に東北は戊辰戦争の敗北によりさまざまな劣位に置かれた。東北のグローバル化はその戊辰戦争をめぐる世相の中で行われており、人々が海外に目を向けた背景に東北の置かれた社会事情を抜いて考えることはできない。こうした状況を理解するために、「グローバル化の中の東北」

について、①海外、②近世、③近代、④民俗の4つの視点から見ていきたい。

また「グローバル化の中の東北」を考える一つの視点として、本シンポジウムでは「音・音楽文化」を取り上げる。近世の東北には、民衆および武士階級それぞれに豊かな音や音楽の文化があった。洋楽は近代への移行に伴う社会体制の変化によって、軍楽やキリスト音楽として日本に導入されたが、東北の場合、武士階級がキリスト教を受け入れたことから、それに付随する音楽も入ってきた。「洋楽」という異質の音楽を意識的に入れようとしたというより、軍楽、あるいは宗教に付随して入ったと見る方が適切であるかもしれない。特に東北はロシアからのハリストス正教普及の拠点の一つとなっただけに、従来の「西からのグローバル」だけにとどまらない、「北からのグローバル」の舞台でもあった。こうした背景の中で、東北ではどのような音文化や音楽の現象が生じたのか、新たな音を受け入れることが人々にどのような影響をもたらしたのか、について明らかにしていく。

以上の内容により、初日はグローバル化の中の東北について、海外の研究者の視点による基調講演を行う。また二日目は北東北を中心とした近代移行期の「音」文化について研究報告に続き、前日の海外から見たグローバル化の視点に加え、近代、近世、民俗の視点を踏まえて東北とグローバル化の問題について討論を行う。

<背景となる共同研究>

本シンポジウムは、主として日本学術振興会科学研究費補助金の助成を得た研究「近代移行期における「音」と「音楽」ーグローバル化する地域文化の連続と変容ー」（基盤B、課題番号15H03232、2015-2018、研究代表 北原かな子）の成果公開がその母体となる。またこの研究はそれに先立って行われた「弘前藩における「音」文化の成立及び「楽」思想の形成と近代への展開」（挑戦的萌芽、課題番号23652159、2011-2013、研究代表 北原かな子）の成果を展開したものであった。

以上の二つの研究成果公開に加え、本シンポジウムで二日目に行う総合討論「グローバル化の中

の東北と文化を考える」では、より広範な視点から東北・グローバル・文化・教育を考察する手がかりを得るべく、国立歴史民俗博物館基幹共同研究である「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」（研究代表、樋口雄彦）メンバー、および東北学の第一人者である広島大学大学院教授河西英通氏の参加を得て多角的な視点からの討論を目指す。

### グローバル化の中の東北

基調講演 ハーバード大学教授・東アジア言語文明学部長  
デビット・ハウエル 「津軽海峡から世界へ」



#### 【講師紹介】

デビット・L.ハウエル (David L. Howell)

1959年福岡県生まれ。ハーバード大学東アジア文明学部長および *Harvard Journal of Asiatic Studies* の編集長。1981年にハワイ大学ヒロ校を卒業後、プリンストン大学に進学し、1989年にプリンストン大学で歴史学の博士号を取得。その間、1981年に北海道大学で学んでいる。テキサス大学オースティン校、プリンストン大学を経て、2010年からハーバード大学で教鞭をとる。

代表的著作に *Capitalism from Within: Economy, Society, and the State in a Japanese Fishery*, Berkeley: University of California Press, 1995 (河西英通・河西富美子訳『ニシンの近代史—北海道漁業と日本資本主義—』岩田書院、2007)、*Geographies of Identity in Nineteenth-Century Japan*, Berkeley: University of California Press, 2005、その他論文など多数。

これまで江戸時代（1603-1868）と明治時代（1868-1912）における日本の社会史に焦点を合わせて研究を進めて来ており、特に19世紀に生きた人々の暮らしと、生活に影響を与えた政治的・経済的制度的変わり方に関心を持っている。最近の研究プロジェクトには、明治維新期についての短い通史や、江戸時代および明治時代の日本の都市部における人々の排泄物の歴史に関するものも含まれる。さらに現在は、*Cambridge History of Japan* の新版の共同編者もつとめている。

#### 【日本語著作紹介】

- \* デビット・ハウエル「グローバルヒストリーの中の近世日本」浪川健治・古家信平編『江戸—明治 連続する歴史』（別冊『環』23）藤原書店、2018、p16-23.
- \* デビット・ハウエル「日本近世史とアーリー・モダン・ヒストリー：時代区分と比較史の可能性」『国史学』210、2013、p98-122.
- \* デビット・ハウエル「武装する農民の内憂と外患」明治維新史学会編『世界史のなかの明治維新』（講座明治維新 第1巻）有志舎、2010
- \* 浪川健治、デビット・ハウエル、河西英通編『周辺史から全体史へ—地域と文化』清文堂、2009
- \* デビット・ハウエル「地域社会に不穏をもたらす者たち」河西英通・浪川健治・M.W. スティール『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院、2005

以上のほか、2017年に中央公論新社から出た佐藤智恵著『ハーバード日本史教室』（中公新書ラクレ）には、ハーバード大学におけるハウエル先生の講義の様子が紹介されている。

#### <講演要旨>

私はハーバード大学で日本史の通史（前近代）を教えています。学生たちにはなるべく京都中心とは少し違うイメージの日本史像を教えようとしています。前近代の日本は京都平安王朝だけではなく、地域から歴史を見直していきたいということで、いろんなテーマを見つけて教えています。その一つに青森県が登場します。

私の出身はハワイで、父の仕事で日本に来たことがきっかけで、日本に興味を持ちました。その後国費留学生として北海道大学で研究生として学び、北海道、東北にまたがる津軽海峡地域の歴史に興味を持つようになりました。北海道東北の歴史に興味を持った理由は二つあります。一つは常夏のハワイで育ったことからくる寒さへの憧れです。もう一つは、私の研究者としての性格に関わるのですが、権力を持った支配者より地道にいきた庶民の方がおもしろい、強者より弱者の視点から歴史を語ってみたいということがあります。地図を眺めるときも、政治経済的力を持つ人々がいる中心地ではなく、偏狭や僻地といわれるところに関心があります。辺境といっても、住む人々たちにとっては世界の中心ですし、私自身がどこからも遠く離れたハワイで育ったことも何らかの関係があるかもしれません。

さて、この日本の地図を見てください。よくあるものですが、中心点は都市の中部地方名古屋周辺になっています。しかし沖縄は北方などは差し込みになっていて本図は入っていません。もし日本の首都が東京ではなく本図の端の方、たとえば那覇とか釧路だったら、地図の書き方はかなり違っていたはず。つまり、中心は必ずしも地理的に真ん中にあるとは限りません。1847年の「大日本輿地全図」では、中心点は京都ですが、当時の朝鮮王国との貿易を担当した対馬藩が大きく書かれています。北のほうでは、現在の青森県も、正確ではないにしてもそれなりに書かれていて、今の青森市の港、三厩、大間、小泊、岩木山、弘前なども表示されています。ただ津軽海峡の向こうの北海道の書き方は対照的です。当時蝦夷とか蝦夷地と言われていましたが、たとえば江差の位置が実際と全く違っているところを見ると、作成者が北海道をあまり把握していなかったことがよくわかります。

ここで、現在の地図と江戸時代の地図を比較して私たちの空間に対する常識を考えてみたいと思います。現在の地図は私たちの常識的な境界線と一致しています。それに対して江戸時代の人々の常識は異なり、北海道も沖縄もありません。私たちがごく自然に感じる日本列島イコール日本国という認識は、百数十年前の日本人には共有されていませんでした。要するに日本という国の領域が永遠に変わらないものではないということです。もう一つは土地に対する私権についての考え方で、今では考えられないことですが、当時蝦夷はどの国にも帰属していなく、独立国でもありませんでした。実は北方全体の領有権に関しては、1875年の樺太・千島交換条約締結まではっきりしなかったのです。なお、日本列島周辺だけではなく18世紀の時代は帰属がはっきりしない地域がたくさんありました。

ここまで津軽海峡の話をはほとんどしていませんが、ここまでの話で念頭に止めていただきたいことは二つあります。一つは中心と周辺は必然的なものではなく、富や権力が集まる場所が中心で、そこから離れた所が周辺となります。富や権力が新たな場所に集まれば新しい中心が生まれる可能性があるということです。もう一つは、地区全体が国に所属するという考え方は、意外と新しい

概念だということです。

さて、最初に掲げた写真をもう一度見てみましょう。これは、かつての青森県北津軽郡市浦町、現在の五所川原市である十三湖です。14世紀から15世紀頃には、十三湊で安東氏の本拠地として大いに栄えました。ここに「この風景は一種のパリンプセスト」と書いてあります。「パリンプセスト」という言葉はハーバードの学生もおそらく知らない人がたくさんいると思いますが、書かれた文章の元の文を消してその上に別の文を書き記すものです。羊皮紙が貴重だった中世では、ナイフなどで古い文章を削ってその上に書くのですが、完全に消すことができず、消された文章が部分的に浮かんで、その方がおもしろかったりします。「パリンプセスト」。私はこの言葉が大好きです。言葉自体よりなくなったはずのものがちらっと見えたりするその現象がおもしろいと思います。NHKの「プラタモリ」という番組がありますが、特に東京都内で撮影した初期のプラタモリでは、東京の激しい移り変わりの中に、どうにかして生き残った江戸の名残を見つけて歩くのが目的で、それがとても面白いと思っていました。普通見逃すような風景が実は歴史に大切なストーリーを物語ってくれている、それが「パリンプセスト」の魅力です。

では話を戻します。この写真に写っている景色はパリンプセストそのものです。600年以上前から残っているこの地域は、十三湊が栄えた頃のメインストリートで、通りの右側には武士の生活を支えた町人たちの店や作業場がありました。今は地元の方々が野菜を作っています。十三湊を支配した安東氏は中世の武将で全盛期には現在の秋田・青森・北海道に勢力を発揮しました。しかし安東氏についての信憑性の高い文献は少なく、その具体像はなかなか捉えられません。安藤なのか安東なのかもはっきりしません。ただ安東氏の面白い点はアイデンティティが非常に曖昧なところですが。日本列島に国家が成立した頃から、その国家に従わない民を取り込もうとしてきました。奈良時代以降は蝦夷征伐を行い、鎌倉時代までには一応東北も支配下に入りました。しかしそれでも中央とは明らかに違うアイデンティティを持つ集団が存在し、11世紀に栄えた奥州藤原家や安東氏がその例になります。アイデンティティとは意識のレベルで働くもので、地位とか人種とかDNAとは関係ありません。言い換えるとアイデンティティには必然性がないので、たとえば「蝦夷」と呼ばれた人々の民族や地方意識については何とも言えません。場合によっては自分を鎌倉あるいは室町幕府の一員として位置付けたり、都合が良ければ自分たちは蝦夷と主張したりしました。安東氏の代々の当主やその部下である武士たちが心の中で自分たちを日本人と思ったかどうかについては今では知るすべがありませんが、あえて推測すれば、彼らは流動的に感じていたのではないかと思います。

十三湊は安東氏が台頭するずっと前からありましたが、港町として栄えたのは安東氏が支配した14世紀半ばから15世紀半ばまででした。十三湊はなんといっても素晴らしい港に恵まれました。旧市浦村役場がつくったパンフレットに、発掘調査の結果をもとに十三湊の街並みが再現されています。どうしても推測はある程度入ってくると思いますが、武家屋敷や町屋、寺社や海運関係の倉庫などが配置されています。そして地図の右中央には安東氏の館と思われる建築物がありました。場所は特徴のないラウンドに見えますが、歩いているうちに土塁が見えてきます。それがほとんどそのまま600年以上残っていることに私はすご



く感動します。十三湊は全国的にも重要な港として認められていました。「廻船式目」によりますと、十三湊はいわゆる「三津七湊」の一つに数えられました。近代以前は黒潮の海流が激しい太平洋では寄港できる港が少なく、比較的穏やかな日本海と瀬戸内海が流通として重要でした。ですから、今日裏日本と呼ばれている地域は、近代以前はむしろ経済的にはとても大切な表側だったと言えるんじゃないかと思われます。三津七湊のうち、実に5つの港が東北・北陸地方にあります。私は十三湊のファンとしてここが三津七湊に入っていることはほぼ当たり前と思いますが、もっと客観的に考えれば中世でも賑やかな港町はたくさんあったはずで、どうして十三湊がわざわざオールスターに選ばれたのか、追求する価値があると思います。一つには、日本海の港のネットワークかもしれません。本州最北端として十三湊はその終着点になりましたし、近世には北前船が日本海を行き来しました。青森県には北前船が寄港した港がいくつもあり、小泊や深浦にも寄港しました。もう一つには、中世の十三湊が最北の賑やかな港町だから三津七湊に入ったのかもかもしれません。三津七湊のうち、日本海沿岸にはない港は、博多や九州南部の坊津ですが、博多は古代から江戸初期までアジア大陸の玄関のようなところでした。坊津は古代から中世にかけて大陸との交流で大いに栄えた港町です。十三湊は日本海沿岸の他の港と強いつながりを保ちながら坊津と同じように、日本とそれ以外の地域の接点としての役割も果たしていました。北海道から来た夷船、南の方からくる京船が十三湊に集まって交易をしました。発掘調査で見つかった記述が、十三湊の国際貿易港としての性格を表しています。

十三湊からは北陸地方で作られた陶器がたくさん出土しています。また中国産の磁器である青磁、白磁がたくさん出てきています。津軽海峡を囲む南北海道と北東北の遺跡から出る割合が他に比べて非常に高く、15・16世紀には出土する陶磁器の実に3分の2が中国産です。17世紀に津軽藩が成立して日本の政権に組み込まれて以降は、中国産の磁器は遺跡から消えてしまいます。したがって、津軽海峡をまたがる地域が日本に組み込まれる以前は国際的な貿易ができて、江戸以降はできなくなってしまったということです。十三湊の遺跡からは北から渡ったものも出土していますが、それが擦文土器です。擦文文化は8世紀から13世頃まで北海道を中心に栄え、のちのアイヌ文化につながっています。

こうした一種の国際貿易港支配した安東氏は、先ほど申し上げた通り、ある時は鎌倉・室町幕府の一員としての立場を強調したり、またある時は日本の政権と一線を引いて自分のことを蝦夷と位置付けたりしました。資料には安東氏をめぐる人物が「夷千島王」の名前で朝鮮に使者を送り、仏教の大蔵経を得ようとしたとされています。中世には本州や九州の武将や商人までが朝鮮から大蔵経をもらおうとしていました。

さて、十三湊に入ってくる物品の代わりに何を返していたかということ、主として北海道やさらに北方の物産が多かったようです。鮭、ニシンなどの魚類、ラッコの皮、そして昆布。こうした北の物産が大量に交易されていました。今の函館市内ですが志苔館という遺跡を見てみましょう。ここは小林氏という安東氏の支配下にいた武将の館でした。志苔館のすぐ近くから大量の埋蔵銭が出土しました。4万枚近く発見された中の99%が中国の銭です。志苔館は全国で見ついている埋蔵銭のダントツ1位のようなものです。埋蔵された時期は15世紀前半と想定されます。証拠はないのですが、これは北海道と津軽地方、そして日本国内の市場あるいはアジア大陸の市場を結ぶルートの中から得られたものと思われます。

日本の辺境のはずの津軽海峡地域が大いに栄えたことを十分に伝えることができたでしょうか？

十三湊は東北北部と北海道を結ぶ役割を通して東アジア世界の中心地点として役割を果たしたと思います。角度を変えてみれば世界も変わって見えるのではないかと思います。今日のご静聴いただきましてありがとうございます。（文責・北原かな子）

コメント 東北学院大学准教授 松谷基和

みなさま、こんにちは。東北学院大学の松谷基和と申します。このような素晴らしい講演会で私が指名されたのは、一つには私が東北（福島）生まれで今も福島に住んでいること、もう一つはハウエル先生が文化学部長を務めていらっしゃるハーバード大学を卒業したということで、東北人とハーバードつながりだろうと思い、コメントさせていただきます。

私の専門は朝鮮半島の現代史ですが、先生の今日のお話の中にハワイにいて周辺からいろいろな歴史を見るようになったとありました。私も福島で育って、東京に行くときは福島弁を直したりするのを見て、なぜ自分の言葉を隠さなきゃならないのかと思ったのです。そして色々学んでいくうちに、遅れているとか田舎者みたいなレッテルが始まったのはそれほど昔ではないということがわかってきて、ではそれを田舎とか周辺と決めたのは誰なのかという気持ちが芽生えました。それが関係して日本帝国時代の周辺と韓国、朝鮮に関心を持つようになったのだらうと思います。そういう点から見ると、今日のお話も繋がる事が多く、教科書や学校教育を通じて当たり前のように見ていたところと歴史の話では全く違う世界が見えてきて、視点を変えることの大切さというか、それがやはり今の自分たちの生き方や世界の見方を変えるには歴史は大事な学問だと思いました。それに今日学んだパリンプセストですが、これもどこの街も似たような感じであっても、歴史を学んで知識を持って歩けば同じ風景も違って見えるし、歴史を踏まえることが大事だと感じた次第です。

また、ハーバードの話をしすると、アメリカの卒業式は「コメンズメント」で、最初はちょっとびっくりしたんですよ。コメンズメントは「始まり」という意味で、卒業って新しい道がひらけているということなんですね。そういう考え方だと思えば、山に囲まれた福島から青森に来て、この先に樺太もあるし、私の関心ある北朝鮮も近いし、これからもっと政治とか変わったり、人の気持ちが変わったりしていけば、また違う世界が開けるだろうと。個人的にもそうですし、ここにいらっしゃる皆さんもそういう気持ちをハウエル先生のお話を共有されたんじゃないかと思います。（文責・北原かな子）



近世東北諸藩ゆかりの古琴演奏

武内恵美子（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）

1. 《流水》
2. 《陽関三疊》
3. 浦上玉堂《伊勢海》



## 研究報告と討論－近代移行期の「音」文化

(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B「近代移行期における「音」と「音楽」ーグローバル化する地域文化の連続と変容ー」研究代表 北原かな子 課題番号15H03232 成果報告)

座 長 浪川健治 (筑波大学名誉教授)

報告1 山下須美礼 (帝京大学准教授) 東北のハリストス正教と音楽 10:00-10:40

報告2 鈴木 啓孝 (熊本大学准教授) 土族の近代と東北 10:40-11:20

報告3 武内恵美子 (京都市立芸術大学准教授) 弘前藩と音楽 11:30-12:10

コメント 古家信平 (筑波大学名誉教授) 12:10-12:30

休 憩 12:30-13:30

総合討論 グローバル化の中の東北と文化を考える 13:30-15:30

司 会 北原かな子

ディスカッサント デビット・ハウエル, 河西英通 (広島大学教授)、浪川健治、古家信平

コメンテーター 谷本晃久 (北海道大学教授)、木村直也 (立教大学特任教授)



\*なお、この時の研究報告を含め、科研による研究の全体報告は、ミネルヴァ書房から「近代移行期の音と音楽」と題して2019年に刊行予定である。